OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	19世紀ボヘミアにおける民俗学的思考の変容 : ホスチンスキーの言説を手がかりに
Author(s)	三谷, 研爾; 中村, 真
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2015, 55, p. 43-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55441
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

19世紀ボヘミアにおける民俗学的思考の変容

――ホスチンスキーの言説を手がかりに――

三谷　研爾・中村　真

ボヘミアは、多民族国家ハプスブルクにおける典型的な紛争地域である。中世以来、チェコ人とドイツ人が混住して領域国家を形成していたこの地域は、宗教戦争期の大きな混乱をへて、17世紀には完全にハプスブルク家領に組み込まれ、ドイツ人が支配的立場を占めるにいたった。だが18世紀末になると、愛邦主義的な学識人によるチェコ語文化の再評価を出発点にして、チェコナショナリズムが形成されていく。当初はもっぱら言語的・文化的な領域で展開されたこの動きは、19世紀半ばをすぎると社会的・政治的な自立性の獲得をめざす活動へと転化した。チェコ人のそうした動向と並行してドイツ人側でも、従来の社会的優位の維持を図るナショナリズム的傾向があからさまになっていく。1870年代に入ると両者の軋轢はいっそう深まり、たんなる地域的な紛争にとどまらない、ハプスブルク帝国の国制じたいを揺るがす状況に立ちいたった。

19世紀の中欧各地に出現したナショナリズムの潮流を、標準化された単一言語の使用にもとづく市民的公論空間の創出の要求、ならびに当該言語の文化的連続性と社会的卓越性の主張とみるとき[1)]、ボヘミアにおけるチェコナショナリズムの形成は、その古典的な様相を示している。チェコ語の文化伝統の発掘および近代的文章語としての再生を基軸に展開された「民族復興 národní obrození」の運動は、チェコ語による公共的な言説空間を確保することに成功した。そうした空間は、ドイツ語による言説空間との拮抗関係をとおして、「チェコ人」意識にめざめた市民を幅広く動員し、その主張や要求をボヘミアの地域社会のうちに定着・実現させていったのである。

じっさい言語と文化は、民族対立がチェコ語による公共的な言説空間の拡大と、それを深刻な脅威ととらえたドイツ系市民の対抗というかたちで進行する過程で、つねに摩擦の焦点でありつづけた。そのさい、言語的な境界と文化的な境界が同一視された結果、教育機関の

1) こうした理解は、南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』（山川出版社 1999年）の第５章「「長い十九世紀」の分水嶺」（篠原琢）に多くを負う。またドイツ／チェコの民族対立の歴史全般については、Křen, Jan: *Die Konfliktgemeinschaft. Tschechen und Deutsche 1780-1918*. München 2000.を参照。

みならず劇場からカフェにいたるまで、およそあらゆる文化的諸制度はチェコ／ドイツに画然と分かれていった。私的な言語選択・使用は、学校における言語教育、公務員任用にさいしての言語能力証明、国勢調査における日常使用言語の申告といった施策をつうじて、そのまま当人の民族帰属のメルクマールとみなされるにいたる。かくてボヘミアは、かたやチェコ語＝チェコ人ならびにドイツ語＝ドイツ人を単位にしたナショナルな統合のうねり、かたや地域社会の不可逆的な分断の波にさらされたのである。こうした統合と分断は、プラハ市議会やボヘミア邦議会といった代議制度を舞台にした、狭義の政治的争闘の帰結としてのみ理解されるべきものではない。それは経済から文化にいたる広範な領域で、相反する諸力のせめぎあいのなかで進行したのである。人文学に代表される学術の世界もまた例外ではない。というのも、19世紀後半から20世紀前半のこの時期、とりわけアカデミックな制度としての人文学は、民衆的／民俗的／民族的な文化伝統の称揚と継承に取り組むことをとおして、ナショナリズム的な力の磁場に深くとらえられていたからだ。当時の人文学知を、「創られた伝統」の歴史性を意識的に隠蔽し、「想像の共同体」の強化に奉仕した知として片づけるのはいとも易しい。しかしながら、もっとも長いタイムスパンで考えるなら、オーストリア＝ハンガリー二重帝国体制が発足した1860年代から第二次世界大戦前夜にいたるおおよそ80年のあいだ、ボヘミアで蓄積された人文学の知が、さまざまな政治的・社会的要因に規定され、また制度的改編を受けて展開したすがたは、けっして単純なものではない。ドイツ側およびチェコ側の動向をともに視野に収め、その実態を比較対照しながら丁寧にフォローする知識社会学的な考察は、1980年代にはじまった。一次資料の発掘と検証が本格化したのは、ようやく近年になってからである[2)]。

本稿では、こうした研究状況を念頭に置きつつ、Volkstümlichkeit / národnost（民衆性、民俗性）にかかわる人文学的な知の位相の粗描をこころみる。ある社会集団の基層となる文化的特質を明らかにしようとする思考態度は、ドイツ語圏ではヘルダーによって喚起され、19世紀前半をつうじて中欧各地に波及していった[3)]。民俗学的思考と呼ぶべきこの方向は歴史学、考古学、言語学などに大きな影響を与えたものの、人文学の学問領域のひとつとして自立していくのは19世紀末から20世紀初頭にかけてである。だがボヘミアの場合、民俗学的な取り組みはチェコ／ドイツの言語文化的な差異を実体化する知的営為、すなわちナショナ

2) Vgl. Höhne, Steffen / Ohme, Andreas (hg.): *Prozesse kultureller Integration und Disintegration. Deutsche, Tschechen, Böhmen im 19. Jahrhundert*. München 2005. Höhne, Steffen / Udolph, Ludger (hg.): *Deutsche-Tschechen-Böhmen. Kulturelle Integration und Disintegration im 20. Janhhundert*. Köln 2010. Konrád, Ota: *Dějepisectví, germanistika a slavistika na Německé univerzitě v Praze 1918-1945*. Praha 2011.

3) 民俗学の学史的展開については、河野眞『ドイツ民俗学とナチズム』（創土社 2005年）、同『民俗学のかたち　ドイツ語圏の学史にさぐる』（創土社 2014年）を参照。

ルアイデンティティをきわめて本質主義的に理解し、かつ具体的に提示する学知と位置づけられた。つまり、伝統的な地域社会が「民族」単位に分化していくなかで、民俗をめぐる学問的言説は、ナショナリズム的統合に不可欠の参照項として、制度的人文学のなかに根を下ろしていったのである。じっさい、民俗に向かう関心が民族をめぐる学知へと転成するプロセスは、チェコ側とドイツ側の双方でシンメトリカルに進行した。

本稿の後半では、そうした知の変容過程をチェコ人批評家・美学者オタカル・ホスチンスキー Otakar Hostinský（1847-1910）の民俗／民族音楽論に即して検討してみたい。いったい19世紀末から20世紀前半にかけてのボヘミア、とりわけ中心都市プラハは、中欧における芸術的モダニズムの有力拠点であり、その文化的生産性の高さには瞠目すべきものがある。ホスチンスキーは、そうしたモダニズムの芸術・文化をになった知識人に先行する世代のひとりとして、一方では芸術における民族性の位置を論じ、他方では民謡の実証的研究に道筋をつけた人物である。彼の著述をとおして、19世紀の前半から後半にかけての民俗／民族をめぐる知の変化、さらには20世紀における新たな文化潮流とナショナルな人文学との離合のありさまを見ていこう。ホスチンスキーの言説の過渡的性格を明らかにすることで、今後取り組まれるべき考察の基礎作業として、19世紀末のボヘミアにあらわれた民俗／民族をめぐる知の制度と内実を確認するのが本稿の企図である。

1　民俗学的思考と民族対立

1.1　ボヘミアにおける民俗学的思考の形式

民俗学的な知を、ある社会において長期にわたって持続し、それゆえより基底的と考えられる文化の諸形態の探求と規定するなら、ボヘミアでのその端緒は18世紀末にまで遡る。この時期、ヘルダーによって唱導された口承的な文化伝統の再発見の動きが、多くの学識人を巻き込みつつ中欧各地に広まり、それに呼応してボヘミアでも民謡や説話などの収集とその背景にある風俗習慣の記録がはじまった。同地の口承伝統の収集は、マイネルト Joseph Georg Meinert（1773-1844）、ヤシュケ Felix Georg Jaschke（1756-1831）、さらにはリタースベルク（リテルズベルク）Johann Rittersberg / Jan Rittersberk（1780-1841）、チェラコフスキー František Čelakovský（1799-1852）などが1820年前後に取り組んだ仕事を嚆矢とする[4)]。この時点ですでにチェコ語・チェコ文化再評価の動きはドブロフスキー Josef Dobrovský（1753-1829）やユングマンJosef Jungmann（1773-1847）を中心に大きく展開し

4) 以下、ボヘミアにおける民俗学の形成と展開については、Lozoviuk, Petr: *Interethnik im Wissenschaftsprozess. Deutschsprachige Volkskunde in Böhmen und ihre gesellschaftlichen Auswirkungen.* Leipzig 2008. に多くを負う。

ていたものの[5]、マイネルト、ヤシュケ、リタースベルクはいずれもドイツ語・チェコ語の別なく収集をおこなった。彼らの活動は、18世紀後半以来の愛邦主義に支えられており、したがってボヘミアという地域の文化を記録するという色彩が強かったのである。じっさい、たとえばマイネルトはチェコ語文化の再生にたいへん好意的で、そこではまだ民族／国民の意識は希薄であったといえよう[6]。またこの段階では、収集活動と創作行為の境界もかなり曖昧で、収集したテクストが収集者自身の美的判断にもとづいて改変されることも稀ではなかった。

19世紀中盤以降、ボヘミアにおける口頭伝承の収集は、一方でグリム兄弟のゲルマン語研究や神話研究に範をとったスラヴ学が形成され、他方でチェコナショナリズムとドイツナショナリズムの対立状況が顕在化してくるにつれて、言語単位でおこなわれるようになる。そこにはまだ、民衆的な口承文芸のうちに共同体の神話と歴史の根源をさぐることで、新しい国民的な芸術（とりわけ文学）の創造につなげようという世紀初頭のロマン主義的な思考が色濃く残っていた。だが収集の原理はやがて、民謡や説話のみならず舞踊や衣装、家屋や工芸などをまとめて Volkskulturととらえる方向に展開し、当のVolk概念じたい社会の基底をなす階層から国民の有機的結合によって編制される Nation へと、その意味内容を転じていく。Nation が何よりまず共通の言語によって規定される社会集団であるならば、Volkskulturとは当然、言語の境界線に沿って分画されるナショナルな文化の総体でなければならない。ここに言語的境界と文化的境界は一致すべきという発想が生まれ、「民族」というひとつの共同体に固有の文化を記録し保存する取り組みが推進されることになる。チェコ人側で先行した民俗文化／民族文化の保全と探求の動きは、ボヘミアの工業化によって農村部から都市への人口の水平移動が活発化し、それとともに伝統的な農村社会が大きく変容していった時期の所産だったことを見落としてはならない。つまり、急速に失われていく旧来の生活習慣とその文化の保存の要求と、領域内の身分制的な社会秩序の近代的なNationへの再編とは表裏一体の関係にあり、民俗文化をめぐる知はそうしたボヘミア社会の変容に同調していた。それは、シュロウベクが指摘するように、ボヘミア史、チェコ国民文学あるいはドイツ国民文学の研究をはるかに越えて「民族としての固有の存在の根底を解明」[7]するものと期待され、たんなる学知にとどまらない社会的機能を果たしたのである。

民俗研究のこのような変容を考えるとき、中世後期以来、ボヘミアにあって学芸の中心機関の役割をはたしてきたプラハ大学の状況を確認しておくことが不可欠だろう[8]。近世初頭、

5）チェコ語・チェコ文学の研究史については、石川達夫『チェコ民族再生運動　多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』（岩波書店 2010年）の第１章および第２章を参照。
6）Vgl. Schroubek, Georg: *Studien zur böhmischen Volkskunde*. München 2008, S.115ff.
7）Ebd., S.150.
8）Vgl. Prinz, Friedrich: *Geschichte Böhmens 1848-1948*. Frankfurt a.M. 1991, S.287ff.

プロテスタント（フス派）とカトリックの宗教対立に揺れた同大学は、チェコ／ドイツの軋轢が強まる19世紀半ば以降、劇場とならぶ言語的・文化的対立の焦点となったからである。1882年、プラハ大学はチェコ系とドイツ系に分割・再編された。この大学分割は、ボヘミアの学術の歴史のうえできわめて大きな転換点であり、以後1930年代末にチェコスロバキアを占領したナチス・ドイツによってチェコ系大学が閉鎖されるまでの半世紀、プラハでは民族ごとに別の高等教育機関が並存する状態が続いたのである。以下、節をあらためて、大学分割に前後する時期の学術のありかたを瞥見しておきたい。

1.2　プラハ大学の分割と民俗学

言語や民族の観点からプラハ大学の歴史をみるとき[9)]、ひとつの画期をなすのは、18世紀末のいわゆるヨーゼフ改革である。ヨーゼフ２世のさまざまな啓蒙主義的施策のうち、1781年の寛容令は、プラハにおいてもユダヤ人の大学入学と学位取得に道を開いた。1783年、中央集権的統治の強化のため、ドイツ語をオーストリアの「国語」Nationalidiomとすることを目指したヨーゼフは、将来的には大学の授業言語をラテン語からドイツ語へ全面的に切り替えるという方向を打ち出し、あわせて大学の組織や授業の変革にも乗り出した[10)]。しかしこれらの改変は彼が死去すると、他の多くの性急な改革施策と同様、見直しや撤回を余儀なくされる。だが同じ時期、ドイツ語の国語化に対抗する動きとして、愛邦主義的な貴族を中心にチェコ語擁護の声が上がった。彼らの働きかけは実を結び、いちはやく1793年、プラハ大学にチェコ語・チェコ文学の講座が開設された。

1848年に三月革命が起こると、プラハの学生たちはドイツ系／チェコ系の別なく学生委員会を組織して、教育・研究の自由、学生結社の自由、教員採用時の信教差別の撤廃、そしてドイツ語とチェコ語の両語による講義の実施などを求めた。革命じたいは挫折したものの、政府はこれらの要求を順次受け入れ、大学には大幅な自治が認められるにいたる。他方、革命がすすむなかでチェコナショナリズムは、指導者パラツキーがフランクフルトの憲法制定国民会議への代表派遣を拒んだことが端的に示すように、大ドイツ的な国民国家の樹立というプログラムに明確に背を向けた。それはボヘミア一円での社会変革の追求、すなわちボヘミア主義からのチェコナショナリズムの離脱を意味しており、革命を支持するプラハの学生たちのあいだに大きな亀裂を生む結果となった。同年11月、ドイツ系の学生はチェコ系が数においてまさる学生委員会を脱退して独自団体「ドイツ人学生読書・談話ホール」Lese-

9) Vgl. Schmied, Erich: *Die altösterreichische Gesetzgebung zur Prager Universität. Ein Beitrag zur Geschichte der Prager Universität bis 1918.* In: Seibt, Ferdinand (hg.): *Die Teilung der Prager Universität 1882 und die intellektuelle Desintegration in den böhmischen Ländern.* München 1984.

10) Ebd., S.14f.

und Redehalle der deutschen Studentenを結成し、両者ははっきり袂を分かつことになったのである[11)]。

以後のナショナリズム対立のなかで、とりわけ1870年代以降、大学もまた言語問題の紛糾に巻き込まれた。すべての専門分野にドイツ系とチェコ系の教授を配置し、試験言語は学生が自由に選択できるという両語並立化 Utraquisierung の道が模索される一方、大学そのものの分割案も提示され、このふたつの案をめぐって両ナショナリズム陣営内部でそれぞれ賛否が分かれるという、きわめて錯綜した状況が現出したのである。1881年、いわゆる鉄環内閣を率いた首相ターフェは大学分割案をあらためて提示し、それをめぐってさらに争乱があったものの、翌1882年春にプラハ大学の分割が正式に告示されるにいたった。関連法令の主要条項を以下に引いておく[12)]。

第１条　1882/83年冬学期開始よりプラハにふたつの大学、すなわち帝立ドイツ・カール＝フェルディナント大学 k. k. deutsche Karl-Ferdinands-Universität と帝立チェコ・カール＝フェルディナント大学 k. k. böhmische Karl-Ferdinands-Universität を置く。
ドイツ大学においてはドイツ語が、チェコ大学においてはチェコ語が、唯一の授業言語である。ただしラテン語の使用は、従来の範囲において維持するものとする。[…]

第２条　教授・私講師は、両大学のどちらか一方のみへの所属を認める。
学生は、両大学のどちらか一方のみへの学籍登録を認める。ただし、授業の少なくとも半数を学籍のある大学で受けている場合には、非正規学生として他方の大学の講義を受けることができる。他方の大学で修めた講義は、学籍のある大学で受講したものとみなして算定される。

これによりプラハ大学の教員、学生、およびすべての大学資産は二分され、ふたつの大学はそれぞれの道をすすむことになった。哲学部を例にとると、新しいチェコ大学は旧プラハ大学から移ってきた教員に加え、多くの教員を新規採用することで、比較的短期間のうちにドイツ大学と遜色のない陣容を整えている。こうした経過をへて、大学問題はさしあたり民族対立の背景に退き、両大学ではむしろ、それぞれの教育・研究の質をいかに維持発展させるかに焦点が移っていった。

さて、前節でみたボヘミアにおける口承文化収集は、19世紀前半には貴族や聖職者、官吏

11) Ebd., S.17.
12) Ebd., S.19.

や教師といった学識人によって着手されてまもないディレッタント的な営みであり、その意味ではアカデミズムの外部にとどまる非専門的な知であった。だが1850年代以降、民俗文化への関心は、農村や小都市の生活に取材した郷土文学的な作品を生み出す一方、大学において探求すべき問題領域として認知され、研究や教育に組み込まれていく。じっさいゲルマン学、スラブ学、インド学、さらには地理学、考古学、歴史学といった学問分野のなかで Ethnographie, Ethonologie, Völkerkunde, Volkskunde, Folkloristik, národopis などを標榜する講義が非体系的に提供され、教授たちがそれぞれの関心から民俗文化や民俗事象へのアプローチを提示した[13]。だが、掲げられた講義題目にしばしば古代学 Altertumskunde, starožitnosti の語が含まれていることから明らかなとおり、彼らにとって社会の基層文化とは古層的なものにほかならなかった。つまり、民俗文化研究は可能なかぎり古い文献に当たる営為、すなわち文献学的方法によって学的正当性が担保される科学とみなされたのである。そうであればこそ民俗学は制度的には、まずなにより文学・語学研究分野にその足がかりを築くことになった。

むろんそれは、文学研究や語学研究から直接に民俗学が派生したことを意味するわけではない。チェコ側でみると、長年にわたって雑誌『チェコ民衆 *Český lid*』の編集長として、またボヘミア領邦博物館の図書部門主任として活躍したジーブルト Čeněk Zíbrt（1864-1932）は、チェコ・プラハ大学では一般文化史を講じていた。当初は同誌の協力者でありながら、やがて学問上の見解の相違から袂を分かつにいたったニエデルレ Lubor Niederle（1865-1944）はスラブ考古学の専門家として民俗研究にも取り組んでいる。スラブ神話学の専門家として知られ、またグリムの『子どもと家庭の童話集』の注釈者でもあった文献学者ポリーフカ Jiří Polívka（1858-1933）、後段で取り上げる美学者ホスチンスキーもまたニエデルレに近く、それぞれの専門分野をふまえて民俗文化にアプローチしたのである[14]。同様にドイツ・プラハ大学でも、民俗文化的な事象への関心は歴史学、地理学、芸術史などの専門家に共有され、またイギリス文学、フランス文学、インド学といった分野では各言語による民謡・民話が講じられた。これにたいし、ボヘミアにおけるドイツ語話者の民俗文化に正面から取り組んだのが、もともと近世ドイツ文学の専門家だったハウフェンAdolf Hauffen（1863-1930）である[15]。彼もまた口承文芸に着目して民俗事象に関心を抱き、ドイツ語民謡の収集・研究を中心に据えた民俗学を構想した。

これらの研究者は、大半が1882年の大学分割以後に着任したスタッフで、したがって彼ら

13）Vgl. Schroubek: a.a.O., S.129ff.
14）Vgl. Lozoviuk: a.a.O., S.86f.
15）Vgl. Ebd., S.107ff. また三谷研爾『境界としてのテクスト　カフカ・物語・言説』（鳥影社 2014年）、201–211ページを参照。

の仕事はチェコ／ドイツという言語的・文化的境界に規定されざるをえなかった。ボヘミアの民俗文化をめぐる知は、なによりまずチェコ民族あるいはドイツ民族の文化特性を究明する学問として自己を主張することによって、アカデミズムのなかで着実な地歩を固めるにいたったのだ。その点で、チェコ側とドイツ側でそれぞれに専門化がすすんだ民俗学の軌跡はおおむね対称的といえよう。しかしながら、視線をアカデミズムの外部に転じると、民俗学的な取り組みが政治的ツールとしても機能する場面が浮上してくる。それが「民俗記録保全運動 ethnologische Bewegung, národopisné hnutí」にほかならない。

1.3　博覧会と学知

民俗記録保全運動は、1870年代以降、チェコ側にあらわれた動きである[16)]。それは、チェコの民俗文化／民族文化、とりわけ物質文化をボヘミア全域にわたって収集保存しようという運動で、初期には衣装が、1880年代に入ると建築や工芸がその対象とされた。

この運動の重要な里程標となったのが、1891年にプラハで開催された産業博覧会 —— 正式名称は百周年記念全領邦博覧会 Allgemeine Jubiläums-Landesausstellung, Všeobecná zemská jubilejní výstava —— である。ロンドンやパリではじまった産業博覧会をボヘミアでも開催するアイディアは19世紀半ばからあった。ようやく1880年代後半に計画が具体化したものの、チェコ系市民とドイツ系市民が協力してすすめることで合意したはずの準備作業は難渋をきわめ、後者が途中で離脱してしまう。結果として博覧会の内容は、工業技術から芸術文化にいたる多様な分野でのチェコ人の活動を集約するものとなったのである。そのさい、巨大な産業宮と機械展示館をメインとする会場の一画に、チェコの民俗文化／民族文化の象徴として、各地域の伝統的な建築様式を融合させた農家風パビリオンが設けられた。内部に各種の民芸品を展示したこの建物は、最新の工業製品や機械、絵画や彫像に劣らず大きな話題を呼んだ。

この成功にもとづいて、1895年には同じくプラハでチェコスラヴ民俗学博覧会 Tschechoslawische Volkskunde-Ausstellung, Národopisná výstava československá が開かれるにいたる。ボヘミア、モラヴィア、シレジアおよびスロヴァキアに住むすべての「チェコスラヴ人」の伝統文化を一堂に集めることを目指した同博覧会は、その準備段階において狭い地域単位で小展覧会をかさねて展示物の収集を図るという、組織的で社会教育的なプログラムの側面を有していた。じっさい翌1896年、民俗博覧会での展示物を恒久保存するためにチェコスラヴ民俗博物館 Národopisné muzeum československé が開館するとともに、各地域では郷土学会 vlastivědné spolky が組織され、また地域博物館の建設がすすめられたのであ

16) Vgl. Ebd., S.77ff.

る[17]。これらの活動により、日常的な生活文化（衣装、住居、習俗など）は典型的にチェコ的なもの、すなわちチェコ人に「固有」なものとして可視化され、さらには各地で開催される展覧会やフェスティバルのかたちで、あるいは歌謡・舞踊の実演イベントをとおして市民生活へと還流していった。つまり民俗文化は、こうした循環プロセスを介してチェコの国民的統合を強化するシンボリックな機能をはたしたのである。それはまさしく民俗文化の「民族化 Nationalisierung 」と「大衆化 Popularisierung 」にほかならなかった[18]。

チェコ側でのこうした展覧会ブームに呼応して、ドイツ系住民の多いボヘミア周縁地域でも、19世紀末から20世紀初頭にかけて同様のイベントが何度かおこなわれている。しかし、その趣旨はあくまで最新の工業技術の成果を示すことであって、伝統的な民俗文化／民族文化の賞揚ではなかった。このような相違の背景にあったのは、チェコ社会に生じた大規模な人口移動である。前節でもふれた19世紀半ば以降のボヘミアの工業化、また1870年代に到来した長期不況と農業危機の結果、ボヘミアからハプスブルク帝国内のみならずドイツやロシアへ、さらにはアメリカへの移住が顕著になり、ボヘミア住民の二人にひとりが出身地を離れた。地域によっては住民が大幅に入れ替わり、言語的・民族的環境じたい別物になりかわる場合すらあったという[19]。地域社会のこうした変質が、急速に消滅に向かいつつある民俗文化の保存要求につながる一方、ドイツ人との本質的差異を示すチェコ人の民族的特性や文化的固有性が成型される条件ともなったのである。いずれにせよ1890年代には、チェコ系市民の民俗文化への取り組みがドイツ系市民に先んじていたのは明らかで、そうであればこそ後者は、以後の経過のなかで積極的に前者を模倣して、その「遅れ」を取り戻そうと努めたのだった[20]。

2　ホスチンスキーの音楽美学と民謡論

前節で見たように、19世紀後半、民俗をめぐる知は専門化・制度化されていく一方、地域に根ざしたフォークロア的なものの探究から、ひとつの民族／国民に固有のもの、すなわちナショナルなものの探究に転じていった。その結果、民俗文化は国民的統合の有力なツールとして政治的に機能するとともに、あらたなポピュラリティを獲得して当の国民社会を広く流通するようにもなったのである。こうした状況は、実際の研究にどのように影を落としただろうか。本節では、民俗／民族を論じた言説じたいに眼を向け、具体的に検証してみたい。ここで取り上げるのは、19世紀後半をとおしてこのテーマをめぐって発言しつづけたホスチ

17）Vgl. Ebd., S.80.
18）Vgl. Ebd., S.81.
19）Vgl. Ebd., S.75. Stölzl, Christoph: *Kafkas böses Böhmen. Zur Sozialgeschichte eines Prager Juden.* Frankfurt a.M. 1989, S.57.
20）Vgl. Lozoviuk: a.a.O., S.82ff.

ンスキーの議論である。ニエデルレやジーブルトらよりもひと回り上の世代の属するホスチンスキーは、プラハ大学分割直前の1877年から、音楽美学と音楽史を担当する私講師として哲学部の教壇に立ち、分割後はチェコ・プラハ大学に属して美学と音楽史を講じた。またプラハ音楽院でも講義を担当し、スメタナやフィビフといった同時代のチェコの作曲家を擁護する評論活動も精力的に展開している。そのさい彼の関心は、音楽と「民族性 národnost 」の関連性を理論的に明らかにすることにあり、とりわけ1869年発表の論考『芸術と民族性 *Umění a národnost*』のなかで詳論した。ホスチンスキーは後年、1890年代の民俗学の専門知化の流れに棹さしながらボヘミア民謡に本格的に取り組み、民謡研究の方法論的刷新をめざした成果を『ボヘミア俗謡 *Česká světská píseň lidová* 』（1906年）にまとめるにいたる[21)]。つまりホスチンスキーは、芸術創造と民族との関わりという点では世紀前半のロマン主義的な議論を継承し、事象の歴史性の探求という点では専門知化する民俗研究をふまえるという、すぐれて両義的な位置を占めているのだ。当時のさまざまな言説が合流し、また分岐する地点に立っていると言ってもよい。約30年を隔てて書かれた『芸術と民族性』と『ボヘミア俗謡』のあいだに横たわる連続と不連続の様相を確認することが、ここでの課題である。

2.1 美と民族性

同時代のチェコ音楽を擁護する論陣を張った若いホスチンスキーにとって、もっとも大きな課題は、芸術と民族性との関係をあらためて吟味し、とりわけ後者の意味内容を明らかにすることだった[22)]。この問題に関してはすでに、普遍的な美と民族性を無媒介に結びつける美学の議論と、芸術作品を「民族精神 národní duch 」あるいは「時代精神 časový duch 」に完全に還元する芸術史の議論が提出されていた。ホスチンスキー自身は美と民族性を位相の異なるものとしたうえ、両者が同時に成立しうる場を根拠づけようとしている。すなわち、

> 美と民族性は、ある種の媒介や融和を必要としうる対立要素ではない。むしろ、元来は互いに異なった要素であり、一方は他方に対して寛容な態度を取るがために、それぞれの要素から独自な分野を前提としうる。そして、これがあるからこそ、芸術はまちがいなく民族的たりうるのであって、自身の美が損われるようなこともない[23)]。

---

21) この著作は1892年と1894年、『チェコ民衆』誌に分載された論考『われわれの俗謡について*O naší světské písně lidové*』に若干の修正を加えてまとめたものである。本稿の議論は1906年刊の単行本による。

22) この問題については、中村真「鳴り響く母語の形式――オタカル・ホスチンスキーの作詩法と音楽に関する著作における「民族性národnost」概念について」（大阪大学文芸学研究室編『文芸学研究』第10号［2007年］、72–94ページ）ですでに論じたことがある。

23) Hostinský, Otakar: *Umění a národnost*. In: Holub, Dalibor u.a. (hg.): *Otakar Hostinský: studie a kritiky*. Praha 1974, S.11. 強調はホスチンスキーによる（以下、同様）。

そのうえでホスチンスキーは、カント以来の美学の議論に立ち戻り、「趣味」を担う主体と「趣味」の意味内容のふたつの側面から考察をくわえていく。

美的判断の根拠としての趣味は本来、個人の主観にもとづくものだが、ホスチンスキーによれば、集団的ないし集合的な趣味もまた存在する。個人と公衆のあいだにはさまざまな形態の集団があるが、それらはすべて各個に集合的な趣味をもちうる。民族もまた集団のひとつの形態として、当然固有の美的趣味をもっているはずである。民族性とは、そうした「民族の趣味 vkus národní 」にほかならない。そして、芸術の作り手と受け手がこの同じ趣味を共有していることこそが、「民族芸術 národní umění」の前提となる[24)]。

では、民族の趣味の内容はどのように規定されるのか。ホスチンスキーはその要因を、民族がその歴史をとおして共有してきた「精神的な特徴や世界観、宗教や伝説など」にみる[25)]。世界観、宗教、伝説というそれぞれ別カテゴリーに属するものを同一次元で扱う論法はかなり乱暴だが、見のがせないのは歴史が必須の契機として導入されている点だろう。なぜなら民族の趣味、すなわち民族性は、民族の歴史全体をとおして形成されてきたもの、そのかぎりで可塑的なものとして理解されているからである。だがホスチンスキーは、民族性と歴史との関連というこの重大なテーマを、あくまで芸術に内在する問題として論じようとする。そこで、民族芸術における「素材 předmět, látka」、「方法 způsob」、「媒体 prostředek」が順次、検討に付されることになる。

ホスチンスキーのみるところ、民族芸術を創出するには、自民族に由来する素材にのみ固執するのではなく、自民族の特質に合致する方法を模索することが欠かせない。もっぱら素材に重きを置き、作品をかたちづくる方法を軽視するのは、偏狭で「愛郷的 vlastenecký」な姿勢でこそあれ、「民族的」なありかたではない[26)]。換言すれば、かりに他民族に由来する素材であっても自民族の方法で扱うことができれば、「民族的」な芸術として成立しうる。こうした主張の背後には、同時代のチェコの音楽状況、ことにオペラ作品をめぐる状況があることは想像にかたくない。じっさいホスチンスキーは、1870年発表の別稿『「ヴァーグナー主義」とチェコ人の民族オペラ』のなかで、音楽作品における「民族性」は、民謡や民俗音楽といった素材を引用・模倣することで実現される、という当時の支配的な論調を厳しく批判した。抒情性豊かなチェコ民謡は、農民の生活に取材したオペラにはふさわしいものの、歴史上の英雄を主人公とするシリアスな内容の作品ではまったく場違いで滑稽ですらある。同時代の芸術家たちは「民族性」の概念を根本的に誤解しているのであって、彼らは「民族的 *národní* 芸術という概念は、民衆的 *prostonárodní* 芸術という概念よりもはるかに広範な

24) Vgl. Ebd.
25) Vgl. Ebd.
26) Vgl. Ebd. S.14.

ものであり、民衆的とはけっして呼べない特質を帯びた芸術の萌芽を多く含む」ことに気づいていない、という[27]。

「方法」をめぐるこうした議論は、さらに「媒体」をめぐる議論へと接合される。すなわち、民族性をあますところなく表現するには、それにふさわしい媒体 —— 具体的には美術・音楽・文学といった芸術ジャンル —— を選ばなければならない。媒体こそは、「民族の精神のもっとも独特な産物でもあり、民族の精神をもっとも純粋なかたちで写す鏡」[28]だからである。この観点からホスチンスキーは、民族の精神活動を支える言語、つまり「母語 mateřská řeč」に直結している音楽と文学を最適とする一方、実用性・実際性の制約を受ける建築、古典古代的な素材と規範を受け継ぐことを定められている絵画・彫刻を不適なものとして斥ける。「我々の思考があらゆる民族と共通の、世界市民的なものになるにつれて、知識層がヨーロッパのほとんどすべての民族に不断なく近付き、交流を持ち」つつある現代においても、民族の精神的特質をシンボリックに規定する母語こそが「民族性の本質をなしている」のだ[29]。この認識のもとにホスチンスキーは、母語に固有のデクラメーション、つまり意味と音調が不可分に結びついた朗誦法を取り上げる。つまり民族的な音楽は、声楽であれ器楽であれ、母語のデクラメーションを様式的に実現しているものでなければならない、というのである[30]。

以上のように論考『芸術と民族性』の骨格を取り出してみると、若いホスチンスキーの主張がはらんでいた問題性もまた明らかだろう。彼にとって、芸術の規範や様式はあくまで歴史的な所産であり、したがって可変的なものでなければならない。しかし他方、彼が民族固有の精神の不変性や純粋性を確保しようとしているのもまちがいなく、それはとりわけ母語をめぐる議論にはっきりあらわれている。その点からすればホスチンスキーの主張もまた言語民族主義の圏域にあると見えるのだが、母語に固有のデクラメーションを「方法」として位置づけていくところに彼の独自性がある。逆にいえば彼の「方法」概念は、歴史的に規定されるべき芸術表現と恒常的なものとして存続するべき民族精神というふたつのベクトルが、ぎりぎりのところで均衡する地点を指示しているのだ。あるいは、両ベクトルが新たな芸術表現の方法を開拓するという一点で結ばれている、といってもよい。こうした議論はしかし、ホスチンスキーが民謡の歴史的実証研究に本格的に取り組むようになったとき、当然ながら、別のかたちに組み直されなければならなかった。

---

27) Hostinský: *'Wagnerianismus' a česká národní opera.* In: *Hudební listy.* 1. 1870, S.83.
28) Hostinský: *Umění a národnost.* S.15.
29) Hostinský: *'Wagnerianismus' a česká národní opera.* S.84.
30) Hostinský: *Umění a národnost.* S.15.

2.2　文献学的研究の射程

1877年以降、大学の教壇に立ったホスチンスキーは美学や音楽史を講じる一方、芸術と民族性の関連という主題を、民謡研究として深めていった。それはアカデミズムの世界における民俗学の専門知化の進行と軌を一にしており、したがって彼自身、若い日に批評として展開した議論を文献研究として鍛え直していく作業に取り組むことになる。その具体的な成果は、古謡写本の検討によって得られた『36の16世紀ボヘミア俗謡旋律 *36 nápěvů světských písní českého lidu z XVI. století*』（1892年）に結実するとともに、論考『ボヘミア俗謡』としてまとめられた。本節では後者に注目して、世紀転換期のホスチンスキーの議論を確認したい。そこでの彼の主張は、多くの民俗学研究者と同じく、伝統的な民俗文化の喪失にたいする危機感に貫かれていると同時に、ロマン主義的な民俗／民族理解を乗り越えようという意志に支えられてもいる。以下、彼がこのアンチノミーにどのように向かい合ったかを追っていこう。

世紀が深まるなか、ボヘミア社会の急速な産業化をまえにして、ホスチンスキーもまた「民謡がかつての民族復興運動の時代に演じていた役割を果たすことはもはやない」と慨嘆せざるをえない[31)]。たとえば、鉄道網の整備による都市と農村との人的移動の活発化の結果、都市部で流行していた物売り歌 kramářská píseňなどが農村部でも流布するようになった。社会が複雑化するにつれて、かつては民謡の主要な担い手であった民衆の思考もまた複雑化し、それまで民謡に歌われてきた日常的な習俗や思考や情念は、現今の彼らの要求に合致しなくなってしまったのである[32)]。つまり、社会の変化と意識の変化が重なり合い、いまやボヘミアでも民謡は消滅の危機に瀕しているのだ。

ホスチンスキー自身、こうした多分にロマン主義的な危機意識を共有する一方で、従来の民謡研究にはきわめて厳しい姿勢で臨んでいる。彼が批判の標的としたのは、言語学者であり民謡研究家でもあったフランチシェク・バルトシュ František Bartoš（1837-1906）の議論である。1895年のチェコスラヴ民俗学博覧会開催にあたって実行組織の名誉総裁を務めたバルトシュは、ホスチンスキーよりもひとまわり上の世代に属する研究者の代表的存在だった。その彼の『チェコスラヴ歌謡集 *Antologie z písní československých*』（1871）の序文、ならびに『啓蒙 *Osvěta* 』誌に発表された論考『われらが民衆における精神の工房より *Z duchovní dílny našeho lidu*』への批判をとおして、ホスチンスキーは自分の主張を鮮明にしていく。

バルトシュによれば、民謡とは民衆の感情生活の素朴かつトータルな表出であり、そうした美質はそれぞれの歌謡の成立時点ですでに完璧に実現されている。「民謡は、あくまでも

31) Hostinský: *Česká světská píseň lidová: úvahy národopisné a hudební*. Praha 1906, S.1.
32) Vgl. Ebd., S.2f.

歌われるものであって朗誦されるものでは決してない。同様に、民謡は、素朴なかたちで生まれてくるものでもある。つまり、歌詞と旋律はともに、激しくも詩的に整えられたある者の思いが突如として迸ってきたものなのだ」[33]という言葉が如実に示すように、その根底には歌詞と旋律を同時に生みだす民衆の創造性にたいする手放しの讃美があった。同じ認識から、「[…] 甘美極まりない旋律を具えた多種多様な歌は、今日においては平々凡々たる内容を具えている。[…] 一連の多種多様な歌は、もとの歌詞を欠いて歌われてきた結果、今日の他愛ない歌詞を獲得するにいたった」[34]という主張もまた導かれる。つまりバルトシュの議論は、民謡は原初のかたちがもっとも完全で、以後は頽落していくという、これまたロマン主義的な退化論的理解の域内にあるのだ。その点をとらえたホスチンスキーは、文献学的研究の成果をふまえ厳しい批判を展開していく。

ここでいう文献学的研究とは、カレル・ヤロミール・エルベン Karel Jaromír Erben（1811-1870）編纂の『ボヘミア民謡旋律集 *Nápěvy prostonárodních písní českých*』（1862）、ならびにホスチンスキー自身の『36の16世紀ボヘミア俗謡旋律』、さらにはネイェドリー Zdeněk Nejedlý（1878-1962）の『ボヘミアにおけるフス派以前の歌謡の歴史 *Dějiny předhusitského zpěvu v Čechách*』（1905）といった集成を活用しながら、歌詞と旋律の両面からそれぞれの歌謡の伝承過程を文献によって確定していく手法をさす。そうした探索にもとづいてホスチンスキーは、19世紀のボヘミアのチェコ系住民の間で伝承されていた旋律の大半は18世紀に作られたものに由来する、なかには15世紀末や16世紀初頭にまで遡りうるものさえある一方、19世紀に入ってから新たに生まれた旋律は僅少だと指摘する[35]。たとえば《まひわよ、小鳥よ*Čížičku ptáčku*》のように、旋律は15世紀末にすでに流布していたものの、歌詞の最初の部分は17世紀には賛美歌の旋律で歌われていた形跡がある、きわめて長い伝承過程をもつ民謡の存在も確認できるという。これらの検討をつうじてホスチンスキーは、既存の歌の旋律に新たな歌詞を付けることで元の旋律じたいに変化が生じるダイナミズムにこそ民謡の価値を見いだし、そのうえでボヘミア民謡の伝承過程は６種のパターンに分類できるとも説いている。

『ボヘミア俗謡』におけるホスチンスキーの主張は、つまるところ、民俗文化が豊かに保持されていた過去を哀惜するのではなく、むしろそれが消滅しつつある現状を受けとめるところに重点があるといってよい。そうであればこそ彼は、民謡集に採取されている民謡を実践的目的に利用する、すなわち「再び民衆のあいだに流通させることをとおして、永遠に民衆の所有物にする」べく働きかけようと述べるのだ[36]。こうした立場は、歴史的な伝承過程

33）Ebd., S.11.
34）Ebd., S.12. 省略はホスチンスキーによる。
35）Vgl. Ebd., S.8.
36）Vgl. Ebd., S.4.

じたいを民謡の特性とする点で、南西ドイツで活躍した民謡研究者ジョン・マイヤー John Meier（1864-1953）が同じ世紀転換期に提唱した「受容理論 Rezeptionstheorie」ときわめて近接している[37]。だがそれは『芸術と民族性』で提示された、民族性を歴史的所産とみる理解が、かたちを変えて展開されていると見ることができる。つまり、若い日にはすこぶる抽象的にしか語られていなかった歴史性の問題が、19世紀後半のアカデミックな民俗学の形成と歩調をあわせ、またホスチンスキー自身の大学研究者への転身とともに、いまや文献学的に実証可能なものとして把握されているのだ。ホスチンスキーにおけるこうした理解の変化ないし深化は、民俗学的思考が世紀後半にいたって専門知として定着し、さらに制度化を遂げていったプロセスに相即しているのである。

2.3　文化の移動／文化の所有

『ボヘミア俗謡』では、民俗文化を歴史的な形成物として徹底的に相対化してとらえる理解が示されているように見える。「ボヘミア民謡ならではの特徴、すなわち厳密に論理的な意味での「記号」としての音楽におけるチェコ人らしさ českost に関する言葉など存在しえない」。それどころか、「すべての民謡に例外なく共通した特徴や、別の国民や民族の歌とはまったく違った特徴など、なにひとつない。また、ボヘミア民謡のなかには、一曲中にあらゆる特性が凝縮されたようなものもなければ、一般的な見解に従った特徴を具えた旋律が付けられているものもない」[38]—— こうした発言から窺われるホスチンスキーの身ぶりは、先行する民謡研究ないし民俗学的思考をくつがえすラディカルさに満ちている。

しかし他方でホスチンスキーは、民族の「精神生活の全体に見られる指向と方法」の存在を微塵も疑わない[39]。それを、器楽に由来する旋律形と言葉に由来するリズムの次元で実証していくとき、チェコ語に固有のデクラメーションにたいする忠実さ、換言すればデクラメーションじたいの規範性は自明の前提とされているのだ[40]。同様の発想は、彼の伝承過程論が含んでいるもっとも生産的な視座 —— ボヘミアのチェコ人が伝承してきた民謡は、農村部に生活するチェコ系住民のあいだでのみ伝承されてきた歌に限定されず、他民族に由来する歌謡をも包含する —— のなかにも、はっきり刻印されている。すなわち、歌謡の言語的・文化的な境界を越える伝播にあたって重要な条件は、チェコ人が当の歌謡を「完全に我がもの」にしていることだという[41]。つまるところ彼の伝承過程論の核心は、文化の移動ではな

37）Vgl. Meier, John: *Kunstlieder im Volksmunde*. Halle 1906.
38）Hostinský: *Česká světská píseň lidová: úvahy národopisné a hudební*. S.36.
39）Ebd.
40）じっさいホスチンスキーはエルベンの民謡収集を分析するさい、語の第 1 音節に強拍を置くチェコ語のデクラメーションを基礎として、強拍から開始される旋律をもつ歌謡の占める高い割合（98.5 パーセント）を指摘している。Vgl. Ebd., S.38ff.
41）Ebd., S.6.

く文化の所有にある。そうであればこそホスチンスキーは、文化的伝統を所有するための要件として、すくなくとも三世代以上にわたって伝承されていることに加え、そこで達成されている生命力の十全さという、およそ論証不可能なカテゴリーを持ち出すのである[42)]。

すでに確認してきたとおり、論考『芸術と民族性』において主題化された「方法」とは、芸術表現を歴史的に規定されたものとみる視線と、民族精神をつねにかわらず存続してきたものととらえる視線とが交差する地点に成立する概念だった。これにたいして『ボヘミア俗謡』で展開される伝承過程論は、言語・文化的境界を越えて移動する民謡の豊かな可能性を提示すると同時に、歴史を超えて民族精神の体現しつづける民謡という理解をも保持している。このように見るならば、約30年の時間的隔たりにもかかわらず、論理構成における両者の相同性は明らかだろう。とはいえ『ボヘミア俗謡』が、民俗学的思考が19世紀後半をつうじて獲得していった文献学的実証の手続なしにはけっして書かれえなかったことも、またまちがいない。集積された資料を時系列的に整理し、そこから個別の歌謡が伝わっていくプロセスを再構成できる見通しが得られてようやく、文化的伝達を歴史的に理解する知に学的基盤が与えられる。民謡の言語・文化的越境もまた、文献の比較考証をすすめるうちに、あらためて確認されたはずだ。民族の対立と分化によって人文学がナショナルな学知へと転成していくなか、こうした越境現象へのまなざしは、チェコとドイツという国民／民族を単位にするのではなく、ボヘミアおよび周辺諸地域を舞台にした民俗現象の生成と移動を検証する道をも指示しえただろう。むろんしかし、それがけっして彼の本意ではなかったところに、つまるところ民族芸術の美学者であったこの知識人の展開した言説の過渡的性格が、文字どおり十全に示されているのである。

（本稿は、平成23－26年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「ボヘミア文学史・民俗誌記述におけるローカリズムの位相」による研究成果の一部である。）

42）Vgl. Ebd., S.7.

Das Wissen vom Volkstümlichen. Geschichte und Nationalität bei Otakar Hostinský im Kontext der Volkskulturforschung Böhmens

Kenji MITANI / Makoto NAKAMURA

Seit der Mitte des 19. Jahrhunderts, als die tschechische und die deutsche Bevölkerung in Böhmen sich zuerst sprachlich und kulturell, später aber auch politisch als Nation formten, wurde eine totale gesellschaftliche Polarisierung herbeigeführt durch die harte Auseinandersetzung der beiden Volksstämme um die Initiative in allen öffentlichen Lebensbereichen wie Politik, Wirtschaft, Journalismus, Erziehung, Wissenschaft und Kunst. Um 1900 isolierten sich die Deutschen unumkehrbar von der immer mehr avancierenden tschechischen Mehrheit, behaupteten sich nur noch im ökonomischen und kulturellen Bereich. Das Ziel der vorliegenden Arbeit liegt darin, die Volkskulturforschung in den Hochschulen Prags wissenschaftsgeschichtlich zu untersuchen, die sich einerseits von der dilettantischen Polyhistorie zur selbständigen Disziplin entwickelt, anderseits als ein kulturpolitisches Instrument auf die Desintegration der böhmischen Gesellschaft bezieht. Diese Doppelheit der Forschung zum Volkstümlichen im ausgehenden 19. Jahrhundert zeigen die Schriften des dem tschechischen Ästhetikers und Kunsthistorikers Otakar Hostinský, *Kunst und Volkstümlichkeit* (1869) und *Böhmisches Volkslied* (1906). Während er einerseits die Nationalität als dendas historisch geformten, kollektiven, kollektive Geschmack definiert, anhand von schriftlichen Quellen die Überlieferung der Volkskultur rekonstruiert und sogar von ihrerihren grenzüberschreitenden Mobilität spricht, beharrt er andererseits aber auch auf demden überzeitlichen Besitzstand des Kulturgutes, der unumstritten im metaphorischen Zusammenhang mit dem böhmischen „Nationalkampf“ steht. Hostinskýs Diskurse verkörpern einen typischen Übergangscharakter des volkskundlichen Wissens, in dem es sich schon zur positivistischen Fachwissenschaft disziplinisiert, jedoch gleichzeitig noch romantische Lehre zum Nationalgeist bleibt.